

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

1. 氏名：金志善
2. 所属先：東京大学大学院人文社会系研究科
3. 派遣形態：H24年度夏学期個人派遣（PD）
4. 研究課題名：植民地朝鮮における邦楽家の音楽活動記録収集
5. 派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

国名：韓国

都市名：ソウル

研究機関名：ソウル大学校音楽大学東洋音楽研究所

コンタクトした主な研究者名：黄俊淵教授

(2) 派遣期間

出発日：2012年7月1日

帰国日：2012年10月1日

総日数：92日

6. 主な研究成果

(1) 当初の計画の概要：200

韓国派遣は、植民地朝鮮における邦楽家の音楽活動の記録の収集を行うことを目的とした。植民地朝鮮には、朝鮮人だけの社会ではなく、支配者の立場で移住された日本人の社会も存在していた。それとともに在朝鮮における日本人社会にめぐる音楽の環境は、日本と同様に邦楽も含まれていた。宴会では三曲などの邦楽が演奏され、お祭りの際にも日本の音楽が流れ、女子学生や夫人たちはお琴を習うなど、在朝鮮日本人社会においては日本同様に音楽環境が形成されていた。その根拠を調べるために韓国派遣を行った。

(2) 実際に達成された成果：400以上

韓国での派遣によりソウル大学校（東洋音楽研究所）や韓国国立中央図書館などで、新聞や雑誌などを中心に植民地朝鮮で行われた邦楽の演奏記録や邦楽関連記事を調べ、当時の朝鮮における邦楽の実態解明に繋がるように整理している。韓国での調査により、邦楽は在朝鮮日本人の社会に深く存在していたことが明らかになった。三曲（琴、三味線、尺八）の公演や歌舞伎、能楽まで行われており、特に、当時尺八の女性奏者は珍しかったのが鈴木藤枝（日本女子大学出身）により朝鮮で演奏会が行われる（1933年9月26日於長谷川町公会堂）など、朝鮮での活動がより開かれていた。仁川にあった歌舞伎座は、歌舞伎だけ行われる機能ではなく演劇や仁川府民大会など、当時は少なかった文化会館や市民の

集まりの場所として利用され、その機能は歌舞伎座ではなかった。また、職場の中では、邦楽部が結成され演奏会を行うこともあった（鉄道局友会館邦楽部など）。なお、平壤妓生学校で朝鮮楽以外に日本の三味線を教授しており、宴会における音楽の版図が朝鮮楽のみならず邦楽にまで塗り替えられていた。そして、戦時期になると、邦楽の慰問公演が開催され、公演の収益金は慰問金として使われた。本調査により植民地朝鮮における邦楽は、日本と同様に根強く密接な関係を持っていたことが分かった。

(3) 今後の研究展望：200以上

今回の調査をもとに「植民地朝鮮における邦楽」というテーマに外地で邦楽が持つ意義について総合的に考察したい。実際に在朝鮮日本人の生活の中で邦楽はどのように存在しており、外地においてどのように変貌し、どのように享有されていたのかなど、その実態研究に迫りたい。また、邦楽が日本人社会のみならず朝鮮人の社会においてもどのような存在であったのか調べ、植民地ならではの文化転移について検討する。これにより、在朝鮮日本人社会の音楽の一面の実態が明らかになり、日韓における近代音楽史の幅を広げたい。

在朝鮮日本人社会における邦楽の実態と役割、朝鮮楽における邦楽という一面が明らかとなり、植民地朝鮮における邦楽が見えてくると予想される。